

《適応指導教室》

不適応（不登校）児童生徒の社会適応能力を伸ばす工夫

～アセスメントと支援プログラムの工夫を通して～

那覇市立安岡中学校教諭

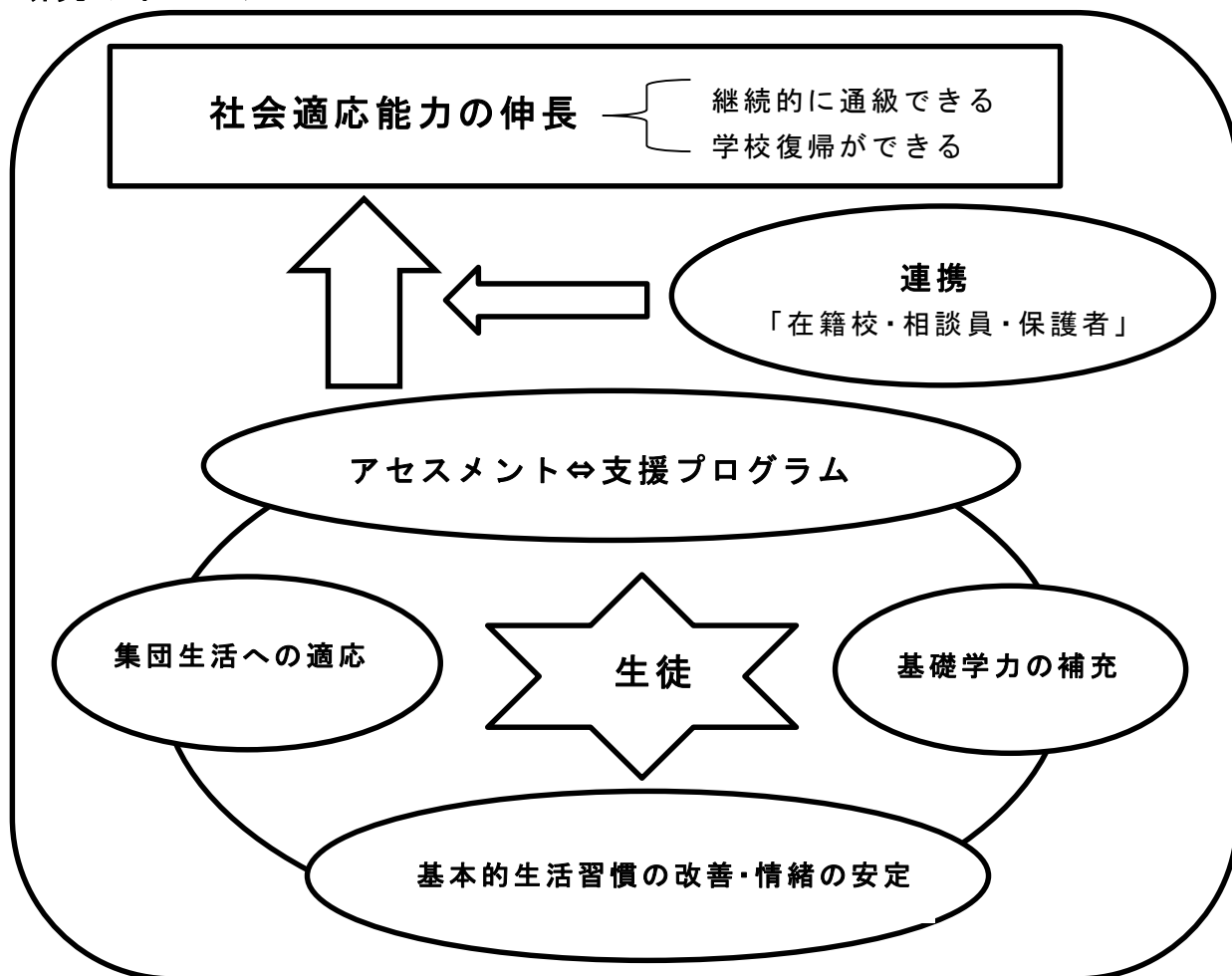
澤岷 優子

＜研究の概要＞

不登校の児童生徒数が高水準を推移する中、文部科学省から「不登校児童生徒への支援の在り方について」（H28.9.14）の課題が示された。本市においても教育委員会を中心に体制作りが行われ、「適応指導教室」が設置された。

不適応（不登校）の生徒が継続的に通級し学校に復帰できるには、個別のアセスメントを重ねた上に「基本的な生活習慣の改善と情緒の安定」・「集団生活への適応」・「基礎学力の補充」が必要であると考え。本研究では、在籍校・保護者・教育相談課の相談員との連携を図りながら、上記の3点を柱に実践を具体化して支援を行い、児童生徒の社会適応能力を伸ばすことを目標とする。

研究のイメージ



I	テーマ設定の理由	57
II	研究目標	57
III	研究構想図	58
IV	研究内容	58
1	研究のベース	
2	アセスメントと支援プログラム	
3	支援プログラムの柱	
	(1) 「基本的な生活習慣の改善」と「情緒の安定」	
	(2) 集団生活への適応	
	(3) 基礎学力の補充	
4	研究の対象となる生徒	
V	適応指導教室経営実践	59
1	アセスメントと支援プログラムの作成	
	(1) アセスメント（見立て）	
	(2) 支援プログラムの作成	
2	支援プログラムの実践	
	(1) ①「基本的な生活習慣の改善」を図るため工夫	
	②「情緒の安定」を図るための工夫	
	(2) 「集団生活への適応能力」を高めるための工夫	
	(3) 「基礎学力の補充」を図るための工夫	
VI	実践を通しての考察	62
1	実践の結果	
	(1) S S Tの経過 K J Qの結果	
	(2) ①個別の出席状況	
	②出席状況の経過と更なる支援体制の工夫	
2	考察	
VII	成果と課題	64
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献》

《適応指導教室》

不適応（不登校）生徒の社会適応能力を伸ばす工夫

～アセスメントと支援プログラムの工夫を通して～

那覇市立安岡中学校教諭 澤岨 優子

I テーマ設定の理由

不登校の児童生徒数は高水準を推移する中、文科省からの通知で「不登校児童生徒への支援の在り方について」の課題が示された。（H28.9.14）文科省は、「不登校に関する調査研究協力者会議を発足させ、現状と課題について総合的・専門的な観点から組織的な取り組みを始めた。内容は、以下の4項目である。（1）不登校児童生徒の実情の把握・分析、（2）学校における不登校児童生徒への支援の現状と改善方策、（3）学校外における不登校児童生徒への支援の現状と改善方策、（4）その他不登校に関連する施策の現状と課題について検討し報告する。不登校については取り巻く環境によってはどの生徒にも起こりうるものであると同時に、その要因や背景が多様・複雑であることから学校や教育関係者の連携と協力の必要性が記されている。

教育委員会においても、学校が家庭や関係機関などと効果的に連携を図り、不登校の児童生徒に対する早期の支援を図るための体制の確立を求めた。具体的には、教員の質の向上、適切な人的配置、保健室や相談室・図書館等の整備、転校のための柔軟な措置、アセスメント実施のための体制作り等があげられた。更には委員会が教育支援センター（適応指導教室）の体制を整備し不登校児童生徒の支援の中核となれるようにと示した。

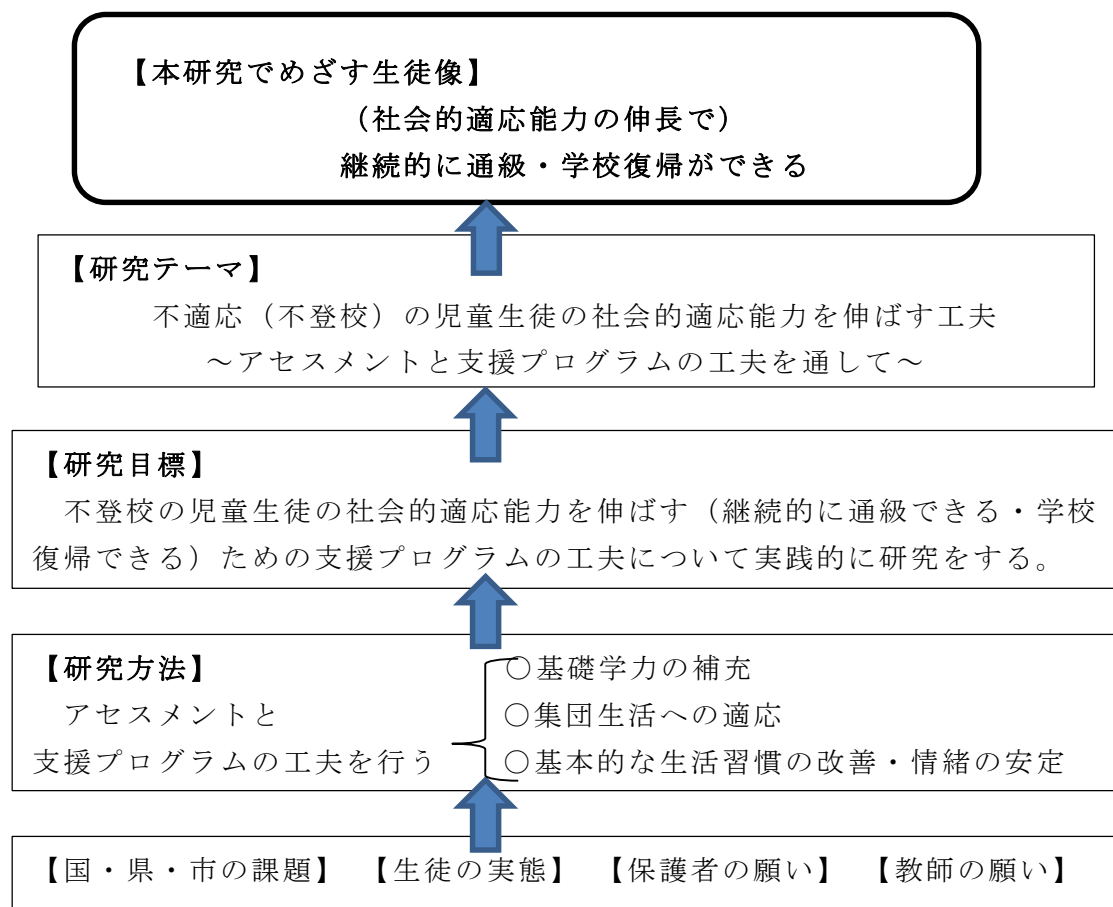
適応指導教室の設置の目的は、「不登校児童生徒の集団生活への適応、情緒の安定、基礎学力の補充、基本的生活習慣の改善を行うことで学校復帰を支援し、社会的自立に資すること」と示されている。

さて私自身の中学校教員生活30年を振り返っても、不適応で学校に通えない生徒を多数見てきた。学校に通えないことは、この生徒児童・保護者にとって、更には学校や社会全体として大きな課題である。今回適応指導教室の担当として、今までとは違う立場で不適応の生徒を支援しながら、生徒の社会適応能力の伸長のための方法について研究できる機会を得た。支援はアセスメント（見立て）を素地に、支援プログラムを作成することから始まる。適切なアセスメントにより3本の柱「基本生活習慣の改善・情緒の安定」・「集団生活への適応」・「基礎学力の補充」をどのように具体化し、実践のプログラムへとつないでいけるかがポイントである。教育相談課の教育相談員・在籍校・保護者との連携を密に、「不適応（不登校）児童生徒の社会的適応能力を伸ばしていけるように実践していきたい」と考え、このテーマを設定した。

II 研究目標

不適応（不登校）の生徒の社会適応能力を伸ばす（継続的に通級できる・学校復帰できる）ための支援プログラムの工夫について実践的に研究をする。

Ⅲ 研究構想図



Ⅳ 研究内容

1 研究のベース

文部科学省からの通知「不登校児童生徒への支援の在り方について」の課題を研究のベースに、県や教育委員会のシステムにのってすすめ、実践の場所は本市の教育相談課適応指導教室「あけもどろ学級」とする。「生徒の実態」をよく把握し、支援は学校や当課の相談員・保護者とよく連携して行う。

2 アセスメントと支援プログラム

不適応（不登校）支援の基本は、アセスメントを素地に支援プログラムを作成することから始める。その要因や背景は多種・多様であり、また複合的なことに起因していると考えられる。アセスメントと支援プログラムの作成にあたっては、この両者は常に双方向の関係にあることを心がけながら、個別の原因を見極めつつも総体的な視野を持ちたい。更には学校や関係機関との連携協力、家庭への働きかけ等、ネットワークによる支援体制を図ることが必要である。

3 支援プログラムの柱

(1) 「基本的な生活習慣の改善」と「情緒の安定」

① 基本的な生活習慣の改善

登校できない大きな原因の一つに生活習慣の乱れが起因していることが多いことが関係機関や家庭への聞き取りで分かった。基本的な生活習慣の改善には、工夫ある学級の取り組みと同時に家庭への働きかけをも行っていく必要がある。

②情緒の安定

学級までは保護者の車で来ても不安が大きくて車から降りられない等の状況もあった。安定して登校できるには情緒の安定が不可欠だ。家庭や課内の相談員との連携、また学級で安心して過ごせる雰囲気作りが必要である。

(2) 集団生活への適応

「社会適応能力の伸長」（継続的に通級できる・学校復帰ができる）が研究の目標であるので、集団生活への適応がポイントとなる。今年度は学級の構成が中学3年生のみであり、在籍校との確認でいずれのケースも卒業まで通級が想定された。

「学校復帰」に関しては（本人や保護者と確認をして）上級学校の進学を検討を進めることにした。進学を支える素地としても集団適応能力を高める工夫を行う。

(3) 基礎学力の補充

登校できない間に当該学年の学力をつけるチャンスを失っていることが予測される。学力に関しては生徒を個のレベルをできる限り把握し、必要に応じて当該学年の枠を超えて基本的な内容を復習したり、また時にはその学年に応じた内容を学習するなど、スパイラルな取り組みを行う。

4 研究の対象となる生徒

研究の対象となる生徒は「あけもどろ学級」に通級する3人の中学3年生とする。

V 適応指導教室経営実践

1 アセスメントと支援プログラムの作成

(1) アセスメント（見立て）

不適応（不登校）の要因や背景に関しては要因や背景に多種多様なものがあると考えられるので、学校や家庭・教育相談課との連携によりアセスメントを行う。教育相談課では、適応指導教室の入級に至るまでにはそれぞれのケースについて親担当・子担当がついて相談や支援を継続して行っている過程がある。その見立ても参考にしながらその後の支援プログラムにつなげていくことができる。

(2) 支援プログラムの作成

支援プログラムの作成にあたっては3つの観点をおいた。第1に適応指導教室としての総体的な年間プログラム、第2に個別のケースをアセスメントした教室としてのプログラム、第3に生徒の個別のケースに応じた個別のプログラムである。

まず年度スタート時に「年間行事計画」を作成する。その作成にあたっては、「関係する学校の年間行事計画」・「沖縄県適応指導教室連絡協議会」・教育相談課相談室「はりゆん」のそれぞれの計画と、当適応指導教室「あけもどろ学級」独自の計画がうまくかみ合い、なおかつ相乗効果があるように工夫する。次に「週の時間割」を設定する。時間割には支援の柱である「基本的生活習慣の改善と情緒の安定」「集団生活への適応」「基礎学力の補充」を実践できる形で盛り込む。生徒を観察し（個別・全体的に）必要に応じて、教室のプログラムの検討を行う。週の時間割の調整、行事の工夫、在籍校との行事日程の調整などが可能である。例えば各学校の定期テスト等も個に応じて当学級での対応を変える等の工夫をする。在籍校に行ける生徒はそこで受験し、無理な生徒は当学級での受験ができるよう態勢を整え

る。

2 支援プログラムの実践

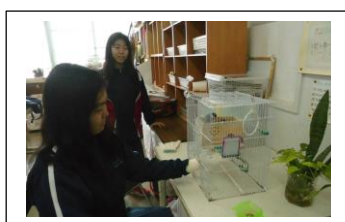
(1) ①「基本的な生活習慣の改善」を図るための工夫

- a 「ウォーミングアップタイム」の実施：1日を静かで落ち着いた雰囲気の中で始める為に、朝の15分間は読書・漢字・硬筆の中から各自好きなものを選び活動をする。
- b 関係機関や保護者との連携：連携の主軸となる相談室「はりゆん」の親担当・子供担当と必要に応じてカンファを重ね、また生活習慣の改善には保護者と連携が必須であるので、日頃の連絡を密にする。

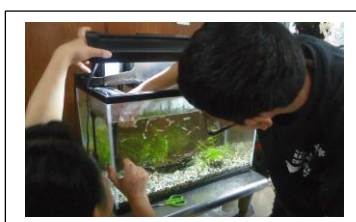
②「情緒の安定」を図るための工夫

- a 「ふれあいタイム」の実施：時間割中に動植物の世話をする時間を設定する。

「文鳥の世話」



「グッピーの世話」



「栽培活動」

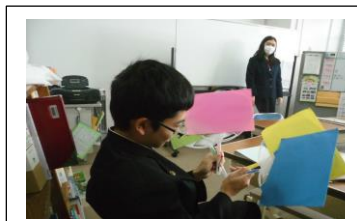


- b 「学級文庫」の設置：図書館で各自の好きな本を借り学級文庫を充実する。

- c 「身体の声なきレッスン」⇔アセスメント（自ら周囲に話しかけられない）

：朝の会で身体の状態を自分で確認して健康管理に役立てた。また同時に自分の思いや考えを伝える時間とすることで、コミュニケーションスキルを伸ばしつつ、学級内のお互いの人間関係を整えた。

「学級文庫」（県立図書館へ ・ 本棚設置） 「身体の声なきレッスン」



- d 「ソファ」の設置⇔アセスメント（体力・気力が追い付かずに欠席してしまう）

：教室経営の工夫として、自分の体力に合わせて各自が必要な休息を取りながら活動できるようにソファの設置を行う。仮に朝の起床や登校がたらくても、登校できたのなら活動の合間等に各自で休憩が可能で体力・気力の調整ができるように環境を整える。自分自身で体調を整えつつ活動できる姿勢を育てる。

- e 「卓球台」の設置：気軽に身体を動かすことで気分転換を図ることができる

- f 「座席配置」の工夫：座席の配置を工夫することで、雰囲気を和らげる。

「ソファの設置」



「卓球台の設置」



「座席配置の工夫」



(2) 「集団生活への適応能力」を高めるための工夫

①相談室「はりゆん」との合同プログラム

教育相談課で支援を受ける他の生徒とも交わり、より大きな集団で活動して集団生活への適応能力を高める。

a 「スポーツ」

週の時間割に活動を入れスポーツを通して交流する。取り組みは「はりゆん」の担当と合同で行う。

b 「SST（ソーシャルスキルトレーニング）」

週の時間割に活動を組み込み、ゲーム等を楽しみながらソーシャルスキルを高める。取り組みは「はりゆん」の担当と合同で行い、事前には指導案の検討会、事後にはカンファを行って常に全体と個別の様子を確認しながらすすめる。SSTの年間指導計画を基軸に、生徒の状態によっては内容を変更するなどの調整をして、効果が最大限に出るように工夫をする。

「SSTの内容」

回	内容	回	内容
1	SSTとは（自己紹介）KJQ	10	上手な自己表現③
2	あいさつをしてみよう	11	怒りのコントロール①（気持ちに気づく）
3	話しかけてみよう	12	怒りのコントロール②（気持ちに気づく）
4	インタビューしよう	13	怒りのコントロール③（怒りの対処法）
5	聞き方のスキル（あいづち）	14	怒りのコントロール④（怒りの対処法）
6	伝えよう（伝言ゲーム）	15	ストレスとうまく付き合うコツ①
7	ホプソ SST（はじめまして）	16	ストレスとうまく付き合うコツ②
8	上手な自己表現①	17	まとめ・上手に借りよう・KJQ
9	上手な自己表現②	18	まとめ・呼吸法・ヨガ（外部講師）

「スポーツ」



「SST」



c 「夏休み子ども体験」：夏休みの特別プログラムとして募集し5日間行った。 d 「読谷15 農業体験活動」

年4回の計画で芋植え・手入れ・収穫を行い自然と触れ合いながら活動する。終了後は海岸で昼食時間をとることで、更に交流を深める。また収穫したジャガイモを材料にして調理実習を行う。生産から調理の流れでより相乗効果を高めることをねらう。

「農業体験」



②「沖縄県適応指導教室連絡協議会」との合同プログラム

県の適応指導教室で支援を受ける他の生徒とも交わりながら、更に大きな集団で活動して集団生活への適応能力を高める。

a 「スポーツ交流会」：体を動かすことを楽しみながら交流する。（年2回）

b 「体験活動交流会」：いろいろな活動を楽しみながら交流する。（年1回）

- c 「いきいき自然体験キャンプ」：9月に渡嘉敷島で2泊し海洋実習等を行った。
- (3) 「基礎学力の補充」を図るための工夫

①時間割の工夫：SST・スポーツ・教科・その他の活動をバランスよく組み込む。
「週の時間割」

	内容	月	火	水	木	金
	ウォーミングアップ 9:00～9:15	読書・硬筆・漢字 等			スポーツ 	
1	ふれあいタイム 9:15～ 9:50	朝の会・飼育栽培活動				
2	スタディタイム A 10:00～10:45	英	SST 	学・総		英
3	チャレンジタイム 10:55～11:35	在籍校の 課題等		学・総		フリー
	11:40～12:00	ステップアップタイム・帰り会				
昼食	お弁当タイム	各自で昼食				
4	スタディタイム B 13:00～13:50	理	国	社	数	
5	スタディタイム C 14:00～14:50	社	数	理	国	

(金曜日の午前中は基本的に月曜日と同じ・フリーは生徒の意見を取り入れた活動)

②学習支援室「ていんばう」との連携 (4・5校時)

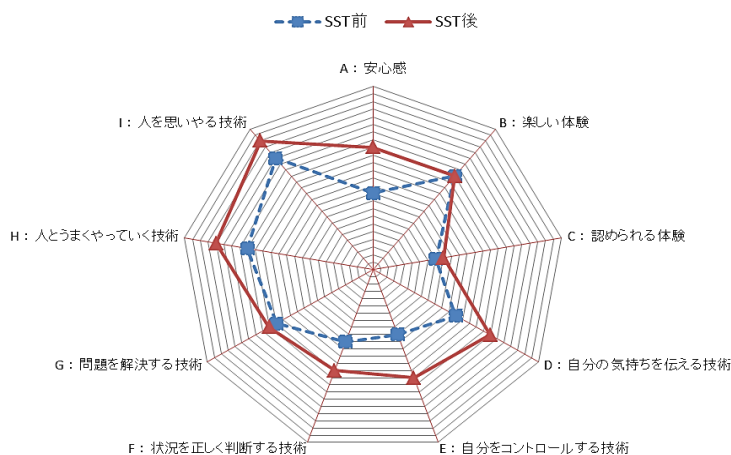
教育相談課の学習支援室「ていんばう」と連携し、学習する場所・時間の調整・職員体制の充実を図る。受験科目の5教科はバランスよく時間割に組み込む。

③各在籍校との連携

- a 在籍校と課題のやり取りを行う。(保護者との連携・メールカー利用 等)
- b 定期テストが受けられるように態勢を整える。(各学校やあけもどろで実施)
- c 出前授業の調整を行う。[夏休みに社会科新聞作り(校外での調査)も行った。]

④キャリア教育の充実

- a 親子進路学習会
- b キャリア学習講演会
- c 上級学校見学(体験)
- d 模擬テスト・模擬面接



VI 実践を通しての考察

1 実践の結果

(1) SST の経過

KJQ (心理テスト) の結果
「生徒C」

(2) ①個別の出席状況

生徒 A (H30・4月入級)



生徒 B (H30・7月入級)



生徒 C (H30・12月入級)



②出席状況の経過と更なる支援体制の工夫

a 夏休み明け「チャレンジタイム」の活用の工夫 (花壇の看板作成)

夏休み明けに登校渋りが観察されたので、時間割のチャレンジタイムを利用して学級の花壇に「看板」(各自の作品として)を楽しみながら作った。

b 冬休み明け「チャレンジタイム」活用の工夫 (筆文字アートの取り組み)

冬休み明けに登校渋りが予測されたので、チャレンジタイムに「私が選ぶ今年の漢字」を選び、気持ち新たに筆文字アートを描き楽しめるように計画した。

c 相談員との連携 (「週1面接」の導入)

11月頃に連続で欠席した生徒に対し心理士の面談を週1回の定期で行った。

d 保護者との連携 (機会をとらえての面談)

11月頃に連続で欠席した生徒に対して保護者面談を必要に応じて行った

(3) 「あけもどろ学級」の活動に関する生徒アンケート（どの活動が役にたったか）

アンケートは(1)～(3)の各柱に対し具体的な活動内容を6項目設定、全部で18項目中「どれが役にたったか」をベスト3で答える形(各項目1点)で3回実施した。

支援プログラムの柱	役にたつ活動内容ベスト3（延べ点数24点満点）
(1) 情緒の安定を図る 基本的生活習慣の改善を図る	学級文庫設置・・・・・・・・・・ 3点 → 3番 ソファの設置・・・・・・・・・・ 1点
(2) 集団適応能力を高める	スポーツ・・・・・・・・・・ 3点 → 3番 チャレンジタイム・SST } キャンプ・農業体験 } ・ ・ ・ 各1点
(3) 基礎学力の補充を図る	キャリア学習（講演会・学校見学等）・7点 → 1番 教科の学習（ていんばう・英語）・ ・ ・ 6点 → 2番

2 考察

- (1) 個別の出席状況に見られるように、どの生徒も「あけもどろ学級」入級後は登校できる状況に改善が見られた。
- (2) 当学級の活動内容に関する生徒アンケート「どの活動が役にたったか」で、最も役にたった活動はキャリア学習（7点）、2番目は教科学習（6点）だった。いずれも支援プログラムの柱(3)の「基礎学力の補充」に属する活動だ。支援プログラム柱(1)の「基本的生活習慣・情緒の安定」について改善が図られ、また柱(2)の集団適応能力が高まる中で、幅広く興味・関心、学習意欲が高まったと推測できる。

VII 成果と課題

1 成果

本研究の研究目標は、「不適応（不登校）の生徒の社会適応能力を伸ばす。（生徒が継続的に通級でき学校復帰できること）」である。学級の生徒は全員中学3年生で本人や家族の希望により上級学校をめざした。全員通級できる力が伸び、将来の職業のイメージも持ちながら積極的な態度で、高校入試にチャレンジできた。目標の達成の為3つの方法（①基本的な生活習慣の改善・情緒の安定 ②集団生活への適応 ③基礎学力の補充）とその具体策は有効であったと考えられる。

2 課題

- (1) 本研究の目標達成の為に3つの柱の一つ「基本的な生活習慣の改善」に関しては、家庭が担う部分も大きい。保護者との連携をしながら家庭生活にどこまで介入できるかは、難しい面を感じた。
- (2) 「基礎学力の補充」のために在籍校と連携する中で各学校の教科の課題にも取り組んだが、在籍校の授業を受けていないのに提出物にチャレンジするのは難しさを感じる時も多々あった。また当学級独自の活動と並行して、在籍校の課題をこなす過程で生徒の負担が大きくなり過ぎないように配慮も要する。適応指導教室の取り組みを在籍校の評価に直接反映できる具体的な方法の検討が必要だ。
- (3) 学級の担当としては複数年取り組めると経験を次年度に活かすことができる。

《主な参考文献》「不登校児童生徒への支援の在り方について」 文部科学省H28・9・14